宝珠山 昇氏インタビュー

1996年４月19日（金）

村田　まず最初に、1970年代、あるいはそれ以降にわたってお話を伺いたいと思います。

防衛計画の大綱ができましたのが1976年でございますが、そのころは、宝珠山先生は、防衛庁の防衛課の課長補佐というお立場でいらっしゃったわけですか。

宝珠山　はい。

村田　昭和何年から防衛課の課長補佐をお務めでいらっしゃいましたでしょうか。

宝珠山　その前、42年11月に防衛庁へ戻ってまいりましたけれども、43年４月に防衛庁部員となっておりまして、ここからと理解していただいて結構です。

村田　これは、部員として防衛課にいらっしゃったわけですか。

宝珠山　防衛課になりますのが43年６月からだと思います。

村田　久保構想が出てきたり、後の大綱につながるあたりは、防衛局あるいは防衛課でかかわっていらっしゃったということですか。

宝珠山　そうですね。直接局長に仕えるという立場じゃありませんけれども、１つ置いたくらいのところにずっとおりました。

村田　ワシントンでもその辺の経緯についてはお話しいただきましたけれども、記録という意味もございますので、大綱の前のあたりから、先生がかかわられた範囲で簡単にお話をいただけるとありがたいのです。

宝珠山　42年11月に防衛庁に戻ってまいりましたが、そのときは３次防の作業の最後でございました。制定直後といってよろしいと思いますが、３次防の整理をやらされました。そこは計画官室というところですが、43年６月に防衛課になるというので、防衛課をつくるための作業を一緒にやったわけです。これは計画と政策をまとめようという発想でした。

43年４月に防衛庁部員、これはいわゆる課長補佐ですが、まさに実務を担当するということで、陸上自衛隊とオペレーションズリサーチの２つを担当しました。オペレーションズリサーチは陸海空及び統合作戦というもので、当時は、ＰＰＢＳということで、マクナマラさんのころに非常に話題を呼んだわけですが、その基礎的な作業のツールという側面があったと思います。

私が防衛庁に入ってからの前半の時期は、計画官の下で３次防のスタディーをしていく中で、３次防までがどういう考え方でつくられ、次の４次防をどうするかという作業の時期ですが、防衛局長の久保さん、丸山さん、西広さん、亡くなった池田さん等が周辺にお

られて、ご指導を得たということです。

中曽根さんが自主防衛構想という形でかなり大きなものを打ち出していく過程があって、雫石の事故がきっかけとなってぽしゃっていく。その後に来る江崎長官などの過程で、一言一句というのはいい過ぎですけれども、４次防が３次防とほとんど変わらないものとしてでき上がります。

この過程で、世の中の世論とのギャップを防衛庁が厳しく感じさせられる。それは、中曽根さんの構想に対するものでもありますが、中曽根さんの構想を支持するグループに対する反発でもあると受けとめられていたと思います。

そのころ出てきたのが久保論文です。久保さんは警察庁の交通局長から防衛局長に来られて、恐らくかねてから温められていたと思われますが、「ＫＢ」と書かれた論文が出てくる。

これについて、私は直接議論には参画しておりませんけれども、庁内ではかなり批判が多く、無視されていく過程が続くように思われます。それは、中曽根構想に対するものとしてはかなりソフトなものと受けとめられて、ユニフォームを中心とする人たちにはなかなか受容しがたいものと映ったとご理解いただいていいように思いますし、私もそのように思います。

五百旗頭　中曽根構想は、ユニフォームの人は割と歓迎だったわけですか。

宝珠山　はい、そう理解しています。

五百旗頭　中曽根構想はユニフォームが支持していて、その支持に対して、雫石事件なんかがあって世の中とのギャップを知らされた。それはユニフォーム外の方々ですか。

宝珠山　久保さんは警察庁から来られて、ユニフォームではない。内務省系、防衛庁の文官の代表ということになります。その方が、中曽根さんのものを踏まえ、中曽根さんの構想が挫折していく過程で学んだものを個人論文としてまとめられる。それは、表向きではありませんけれども、中曽根自主防衛構想を支持したグループにはなかなか受け入れられなかった。

村田　内局の中にも中曽根支持グループは存在したわけですか。

宝珠山　これは防衛庁長官と役人との関係でございますので、なかなか難しいんですけれども、強かったということはいえると思います。中曽根長官の秘書官の池田さんは、中曽根長官の秘書官として、庁内と中曽根さんとの間をつなぐパイプとして庁内をまとめる十分な機能を果たしたと思いますので、内局を含めて中曽根構想には支持があったといえま

す。

村田　西広先生なんかは、中曽根支持グループからは距離を置いていらっしゃったわけですね。

宝珠山　いやあ、どうでしょうか。彼自身がその中にいたわけですから。嫌であったかどうかは知りませんけれども、その構想策定に私ども以上に参画する、より近い立場にいたということはいえますね。

村田　先生にもごらんいただいた西広先生のインタビューの中でも、中曽根長官の登場は日本の防衛政策の上でエポックメーキングかという田中先生の質問に対して、そうは思わない、パフォーマンスはあるけれども、実質はそんなことはないと割とネガティブなお答えだったものですから、少し距離があるのかなという印象を持ったんです。

宝珠山　西広個人との間には距離があったのかもしれません。しかし、議論の過程では全部乗っているということはいえると思います。

日本の防衛政策の過程でどういう影響を与えたかといいますと、他の要因ではありますけれども、つぶされていく。そして、中曽根さん、あるいは中曽根グループというべきか、その人たちが考えていたものとは逆の効果になって出てきたということにおいて、結果的にはマイナスの効果をもたらしたという意味は十分にございます。

５で来ていたところを10にしようとした。普通の役人は、５から10という構想は考えないわけですが、中曽根さんはそれを考えた。普通は、７か6.5ということでずれをカットする。それを一挙に10の構想を打ち出して、その構想自体が叩かれるとともに、事故などによって世論の反発を強く受ける形で、６にもならない形になった。

田中　中曽根さんの構想の核心は何だといったらいいんでしょうか。つまり、それまでの３次防は、通常戦力による局地戦以下の事態に対応するために必要な防衛力まで持ち上げるという考え方ですね。中曽根さんの場合、その考え方の中で、特に海空を非常に重視したといえばいいのでしょうか。

宝珠山　１次防以後といってもよろしいと思いますが、今田中さんがおっしゃったように局地戦以下の事態に対応し得るものを構想して作業をするわけですが、現実的には予算の制約等々がありまして、はるか下の方で防衛計画をつくらされるということが３次防まで続くわけで、この計画に携わってきた人の背後にいるたくさんの人を含めて、なぜ（日本が整備すべき防衛力の長期的、具体的な）目標を明確に示さないかという不満がずっと蓄積されていた。久保さんの言葉をおかりしますと、これが「脅威対抗論」による防衛力な

わけです。

どのくらいかわかりませんけれども、脅威対抗論でユニフォームの人たちが描くものの恐らく6割かそこらのものしか3次防までは来なかったというところが基本的にございます。それを中曽根さんが「よし、わかった」ということで、脅威対抗論に基づく防衛力の目標を公にしよう、それをどういうテンポでやっていくかを防衛力整備計画で決めようというのが自主防衛構想の本質だと思います。

西広氏もいっていたかと思いますが、その中で、結果的には5年間では無理だということをある時期理解して、10年後に達成しようということで庁内のコンセンサスを得たのが中曽根自主防衛構想であり、4次防の前段である。その内容を分析すると、海空に力が入っているものである。これは金のかかるものでもありますが、昭和30年代から日本経済が力をつけていく中で、装備をみずから開発する力をつけた防衛産業界の背景も多分念頭にあっただろうと思われるわけです。

村田　西広先生がインタビューの中で、中曽根長官が記者会見をするときに、陸海空から上がってきた原案をそのままホッチキスでとじて発表してしまったから、数字だけがやたらに大きくなって大騒ぎになったというエピソードをいっておられたのですが、あれは事実でしょうか。宝珠山先生はご存じございませんか。

宝珠山　私はその現場にいませんでしたので、その事実関係は何ともいえません。しかし、陸海空がどのような防衛力が必要であるかという作業をまずします。それを調整するのが防衛局の役目で、防衛局の調整を得ることなしに大臣に行くことはないといえる。

したがって、結果的にそうであったということであって、形式的にも、実質的にも、大臣に上がるところを防衛局長、防衛課長がチェックしていないというのは、責任逃れといわざるを得ないですね。10年後を目標にしておりますので、数字が大きいという面はあるだろうと思います。

ついでに申し上げますと、中曽根さんがおいでになって間もないころ、核を持たないで核を持っているのと同じ通常兵器による防衛力を算定してくれという作業をさせられたことがあります。「大臣の要望だからやってみろ」というようなことをいわれたことがございまして、もちろん中曽根さんに申し上げるような立場にはありませんけれども、僕らは「それはできない」と申し上げたんです。

そういうリーダーシップ、強い個性を持っておられる方が上におられましたので、私どもができないことを幕僚監部におろす。それで上がってきたものを評価するにも、未経験

の世界ですから、「こんなものがあります」というのをご報告したのを記者会見でおっしゃったということはあるかもしれませんが、通常はないですね。

五百旗頭　例えばソ連の脅威に対抗するために、核はないけれども、核があるのと同じ水準の軍事力を日本が通常兵器で持とうということですか。

宝珠山　持つとしたら、どんなものが幾らかかるかというようなご下問です。

五百旗頭　日米安保によるものというのはどういう前提ですか。

宝珠山　それは日米安保が前提なんです。解説を聞きますと、「核の価値がどのくらいあるかをはかるためだ」といわれるんですけれども、事務的におりてこられるとなかなか難しい。作業をやってみましたけれども、要するに「わからない」という回答を出したわけです。

村田　米軍基地をかなり返還して、必要に応じては有事駐留みたいなことに切りかえてはどうかということも、中曽根さんが検討を指示されたというような話が西広さんのインタビューの中に出てまいりまして、西広さんは、それについては非常に難しいということをるるご説明申し上げたといっておられますが、そういうご経験もおありになりますか。

宝珠山　有事駐留は民社党が古くからいっておられまして、よく論議になりました。したがって、中曽根さんの命のもとに、西広氏を通じておりてきたかどうかはわかりませんけれども、よく論議されたことは確かです。

村田　結論としては、有事駐留は非常に難しいというものですか。

宝珠山　難しいというよりも、今度の日米首脳会談以後の１つの課題かもしれませんけれども、日本はそこまで熟していないんですね。10年間でやるとしたら何をやればいいかという検討はできるかもしれませんけれども、有事駐留を４次防の中でできるかといわれると、「とても無理です」という回答しか出てこない。なぜ無理かということを、幾つかのファクターを挙げてご理解をいただくのがせいぜいです。しかし、有事駐留については、日本の自主防衛構想を別の意味で表現する言葉でもあるのですが、根強い支持はございました。

五百旗頭　制服組の中でですか。

宝珠山　まだ旧軍の方々が幕僚監部の中枢部に残られている時期でしたから。

五百旗頭　むしろ自立性という意味で……。

宝珠山　そのように理解しています。

五百旗頭　ＫＢ論文のような観点に対して、制服組の中で支持は余りなかったのですか。
宝珠山　まずなかったと思います。なかったので、あれは無視される時期がかなり続くわけです。
村田　その間に、久保防衛局長がＫＢ論文的議論を繰り返して、庁内でずっと根回しをされていくということになるわけですか。
宝珠山　久保さんは根回しにはたけていない人なんです。無視されても主張を繰り返していくといった方がよろしいんじゃないですか。
田中　防衛庁の中では、個人論文はほかには例はあるんですか。政策決定のメカニズムとして防衛局長が自分の個人論文をつくって、それをサーキュレートする、そういう形はあるんですか。
宝珠山　それ以前には多分ないと思いますが、私は大綱をつくるときには使いました。例えば防衛課意見として出ますと、反対意見がいいにくくなる面があるわけです。しかし、陸海空、統幕、内局の政策を担当する者が集まってディスカッションするときに何か材料が欲しいというときには、これは個人のものだ、たたき台だ、きょうはフランクに意見をいい合おうじゃないかという形では使いました。これは私の推測ですが、中曽根構想が崩れていく中で、何かをつくろうというときの討議の材料という意味で発想されたとご理解いただいていいと思います。
　なぜ久保論文が出てくるかというと、４次防がつぶれていく過程が反省材料としてあるわけで、これは国会でもいろいろ叩かれる中で出てきておりますので、久保さんとしては、より広範な支持が得られるのじゃないかという意図はあったと思います。久保さんの構想は防衛庁内の支持を得るに至らない時期があったのですが、坂田さんが登場し、久保さんが次官になって、ここで再び引き上げられる。
村田　防衛局長をお務めになった方ですから、次に次官になるのはそんなに不思議ではございませんけれども、その方がお書きになった論文が庁内では不評で長く無視される、その方が次官になるのは、人事的ルーティーンでそうなったということですか。坂田長官のご希望ではないですね。
宝珠山　同期の田代さんが次官になりまして、久保さんは施設庁長官に回るわけですね。施設庁長官になられても防衛の方の勉強に精力を注がれるという姿はございました。そこに坂田さんがお見えになりまして、いろいろディスカッションをする中で波長が合ったこ

とは確かだと思います。

坂田さんの回想録の中でも、久保さんのような論客がいて助かったと書かれておりますし、坂田さん自身、大臣室で大臣の前で久保さんとユニフォームを一緒に討論させた。久保さんの言い分をいわせ、それに対する反論をいわせる、それを坂田さんが采配するという手法をとられました。大臣室での論議は、下の方で練り上げて、手打ち式に近いものにするのが普通の手法ですけれども、坂田さんはあえてそうでない手法をとられましたね。

村田　この間、久保防衛局長の話の記録を拝見したら、久保さんは国民のコンセンサスづくりということを随分いっておられるんですね。軍事的に見て、仮に90点の防衛力整備をしても、国民のコンセンサスがなければ60点ぐらいにしかならない、ところが、70点の防衛力整備でも、コンセンサスがあれば、それは90点、95点の値打ちがあるということを盛んにいっておられる。

坂田長官と波長が合ったのも、お２人とも、防衛力整備のあり方がどうこうというよりも、４次防の後を受けて、特にコンセンサスづくりみたいなことをやらないといけないという政治判断みたいなところで波長が合ったということでしょうか。

宝珠山　久保さんは、坂田さんに会う前からそういうことはおっしゃっておられましたね。それはシビリアントータルに共通する思考法（国民を説得する理念と意欲を持たない人がいうのには強い反発があるもの）だといえるように思いますが、それだけで波長が合ったというよりも、坂田さんは、文教族として大学紛争をおさめる過程で、世論をいかに味方につけるかという手法を非常に重視された。その手法を防衛でもとれないかということはあると思いますから、久保さんのアプローチと坂田さんのアプローチがそこで焦点を結んだことは確かかもしれませんが、そのことのためにということではないだろうと思います。

坂田さんはゲーテのことをしばしば話に出されておりましたね。あの方はドイツ文学かなんかのご出身でしょう。

村田　あの方は独文ですね。

宝珠山　（ゲーテのことは）私はよく理解できないんですけれども、そんなことをいわれながら、日米の防衛力と国民の支持ということで３本柱を打ち出される。それは久保さんの影響であるよりも、坂田さん自身の若いころからの体験、近くでいえば、文教政策の中での体験を踏まえて出てきたものではないかと思います。

田中　ＫＢ論文の考え方がある程度無視されるということがありますが、４次防の決定の後に平和時の防衛力を決めろという話ができて、つくったら、野党が、こんなものは受け

取れない、ないことにしてくれという話がありますね。このときの日本の平和時の防衛力の考え方は、私なんかの目から見ると、久保さんの考えていることそのままだという感じがしますが、そう考えていいのですか。

宝珠山　それは久保さんが、おれの構想は、こういう仮定に立ってのものだがということで出したものですから、まさにそうだと思います。しかし、その論議の過程で、ユニフォームを含めて、あの数字でいいのかということについてのコンセンサスにまでは至っていなかった。

田中　そうすると、国会に報告するところで、このぐらいというのはいったけれども、防衛庁に持ち帰って、それをベースにまたプランを積み上げるようなことを始めると、果たしてどうなるかわからないというようなあいまいなところだったわけですか。

宝珠山　陸海空幕僚監部の意見が全部通るということではありませんから、防衛局長としての答弁として、そこで見切り発車をしたというような世界があったのだろうと思います。

田中　でも、（野党が）これは受け取れないという話になったから、撤回して、そういうことはなかったかのように事態は推移するわけですね。

宝珠山　そういうことですね。しかし、それを再びもう少し精巧に組み上げていく過程で坂田さんが登場することになります。

田中　当時の防衛庁の中で、ＫＢ論文とか一連のものを読むと、久保さんはどちらかというとかなり理屈っぽいですね。こういう概念をわざわざつくって、その概念に沿って防衛力を正当化するというか、すっきりとした絵に描くという感じがするのですが、こういう考え方自体に違和感を感じる方はいらっしゃらなかったですか。

坂田さんと久保さんで基盤的防衛力という考え方を出す。それに対してユニフォームの方は批判をされるわけですが、批判したときの対抗イデオロギーははっきり出てくるわけでしょうか。

宝珠山　それは、久保さんの脱脅威論と（それ以前の）脅威対抗論で象徴されるだろうと思います。ユニフォームの方は、３次防以前の脅威対抗論で目標を定める。５年計画であれば、途中まででもしようがない、先のものは示さないで、行くところまで行こうじゃないかという考え方だと思います。

それに対して脱脅威論は、脅威対抗論に立つ目標は念頭から去れ、「ここまででいいよ」

ということをいえということです。５年間の中で（整備する事業について）は合意できても、将来を拘束する目標をそこまで下げることには妥協できないということで論議することになる。これは坂田さんの前で何度も繰り返される。同じことを久保さんがいい、ユニフォームの側も、陸海空幕僚長等が別の側面から同じことをおっしゃる。

田中　脅威対抗論の論理をロジカルに突き詰めていった結果が中曽根さんの考え方ということになりますね。

宝珠山　そうですね。

田中　脅威対抗論の方からいけば、今のソ連の脅威はこれだから、これを達成するためには何年かかろうがここまで行かなきゃだめだということをまずいった上で、これに何年かかるか計算してみましょうということですね。でも、これが受け入れられないとしたら、久保さんに対して「それは困る」といっている論理は、どうやれという話になるんですか。

宝珠山　たまたまあの時期受け入れられないとしか考えていないということだと思います。戦後ずっと何次防と積み重ねてくるわけですけれども、１次防以来、そういうものを描きながらも、こういう理由でこの５年間はここまでにしようということで妥協を繰り返してきている経験者の集団ですから、過去に目標としていた数量よりも何よりも、概念自体を取っ払え、おまえは別の世界、脅威がない世界に行けといわれているようにとった。「脱脅威」という言葉が引っかかったんだと思います。

脅威がないところに防衛力は必要かという議論を始めるわけですが、「脱」とはそういう意味じゃないということで、大臣の前の議論としては余り洗練されていない。そこでとったのが限定小規模です。

村田　そうしますと、大綱の場合、４次防の経緯があって、国内政治情勢的に受け入れられない、予算的制約があるということで脱脅威論という考え方が出てきて、国際情勢認識はその後からつけ足されたものと考えてよろしいのですか。

宝珠山　大綱のところは妥協の産物であることは確かですね。あそこで「前提とする」という言葉を使っておりますのは、私どもの逃げです。「前提とする」ということで防衛庁の荷物を軽くしたんです。

それに伴って、先ほどから脅威対抗論で出てくる防衛力と、現実に大綱で目標とするであろう差額の部分は、政治のリスクという説明に切りかえていく。政治のリスクということは、すなわち、ユニフォームには有無をいわせません、というのがいいかどうかわかりませんが、少なくとも防衛庁の内局以上のところで責任を持ちますから、あなた方は入る

場所がありませんよという世界に持ち込んでいくのが大綱策定過程です。

第２次の長官指示の中で、そのことを図に描いて示してはっきりといっています。「前提とする」というのは、ある意味ではユニフォームに対する材料でもある。前提が満たされないときについて、あなた方は責任を持たなくてもいいですよという言い方でもあります。

この図はごらんになったことがあると思いますが、坂田さんがいろいろいわれる中で、私どもがつくったものです。たしか「政治のリスク」というのをどこかに入れたと思います。私の方では、それを時系列に描いて図式化しました。

田中　ここに「政治的リスク」と書いてありますね。

宝珠山　これは時間の概念を入れましたので、この部分をこういう形で表現したんです。ここらあたりに「政治のリスク」というのを入れたと思います。急増強するかどうかというのを政治が負えばいい。

田中　政策決定者が必要と認めれば、情勢の変化に応じて移行するということですね。

宝珠山　政治のリスクにすることによって、庁内は反対しにくくなったということがあります。それから、脱脅威ではない、限定小規模という脅威を描くものだということで、限定脅威はどういうものかということについては議論はありますけれども、国際情勢を前提とした情勢の中での脅威ということで、抽象論ですけれども、反論はできなくなるんです。

村田　限定的小規模というのは具体的にいうとどういうことかということで、例えば何個師団程度のものがどの程度の期間に侵攻してくるとか、その後国会答弁なんかで明確にしておられるわけですか。

宝珠山　長い間の議論を集約するとそうなります。大体数個師団、航空侵攻は数百機です。

村田　それは国会かなんかでおっしゃっていますか。

宝珠山　はい。これは国会答弁させられました。オペレーションズリサーチでいろいろなケーススタディーをやっておりますので、その裏打ちはあるわけですが、オペレーションズリサーチの詳細なものは公にはしておりません。２個師団の場合もあるし、３個師団の場合もあるし、もっと多い場合もある。逆にいいますと、大綱に書いてございますように、米軍が来援するであろう間持ちこたえられる程度のものが数個師団に集約されるわけですね。数個師団は５個師団以上かというような質問もあったかと思いますけれども、そんなことにはならない、数個は数個だというようなことを繰り返したわけです。

田中　４次防の最後のときの「防衛構想について」というところにちょっと似たような文

章がありますね。あれは何であそこに入ったんですか。

私もチェックしてみると、先ほどおっしゃられましたように、３次防の大綱と４次防の大綱は全く同じ文章で、４次防の場合は大綱を春ぐらいにつくって、決定のときに国際情勢認識と防衛構想を別にしていますね。その構想のところで、限定的小規模という大綱と似たような文章がありますね。

宝珠山　「限定」はないはずですが。

田中　その時点で、前の３次防みたいな局地戦以下の云々というのと少し考え方が変わっていたということですか。

宝珠山　それは、４次防を策定し切れなかった、沖縄返還の方に力を注いだ政権であったと私は理解しております。その中で予算を組まなければいけない。何か形をつくろうということですが、数字にわたるものはつくれない。要するに政府内でまとまらない。何隻建造、何機取得、何兆何千億というのは決め切れないという状況に追い込まれる。その中で、構想は数字が１か３かぐらいの話はどうにでもなりますから、そこまでまとめたというだけの話です。

別々に出てきたというのは、従来は秘の世界でおさめていたものを出すことによって、何か新たなものをつくったかのごとく外には見せたというのが実体ですね。したがって、秘の世界を含めるならば、構想自体に差があるわけではない。

田中　そうすると、４次防策定の最後のところは混乱をきわめていたということですか。

宝珠山　そのとおりです。人の関係でもそうだったといえると思います。

村田　丸山昂先生が、「大綱は４次防の葬式だ」という言い方をされたのを私は記憶しているんです。

宝珠山　４次防の葬式というか、４次防以前の20年間の葬式ですね。それは、所要防衛力構想に対する葬式という意味だと思います。

田中　次の防衛白書もそうですが、こちらのご論文とかで、基盤的防衛力を大綱以上に詳しく明快にご解説になる。それに対して、いわゆるソ連の脅威の認識の増大はどんな影響を与えたとお考えですか。

宝珠山　これはまさに、内局とユニフォームとの間で、所要防衛力を限定小規模に削っていく過程そのものだと思います。所要防衛力構想の中で、例えば当時の師団の配置、航空機の配置、艦船の配置がロシア、ソ連トータルで見る、その中からヨーロッパ部分を差し引いて極東だけに絞りましょうというところまでは、所要防衛力構想の中でもコンセンサ

スがあった。核は無論別ですけれども、移動の速い部分をどう考えるかというのは分かれるのですが、例えばそのうちの３分の１ぐらいをこちらに仮定しようというようなことで手が打てるところがある。ところが、それでいきますと、結果的に大綱の中で出てくるような防衛力ではどうにもならないということが私どもの方にあるわけで、そこから、小規模侵略ではなくて「限定」をつけたわけですが、「限定」のつけ方として、「特段の準備をすることなしに」という概念を導入するわけです。

普通、侵略なりをすると仮定しますと、兵の補充、装備の稼働率を上げるということがある。そうではなくて、今あるがままで来るということを限定小規模の基本概念に考える。もう１つは、国際情勢の方から来るのですが、中ソ対立を前提とすると、極東の中でも中国に対して控置するであろう部分は我が国向けから除外することができる。そうすると絞れるということがございます。その仮定がいいかどうかということになると、限りない議論になるのですが、そう考えようというところで落ちついたと思います。

田中　それで大綱まで来たわけですが、その年あたりからソ連海軍、空軍の活動がどんどんふえてくるわけですね。これは、その後の庁内の意見にどういう影響を与えたのですか。
宝珠山　策定直後からというのは別にして、それがピークに達するのが、79年だったかと思いますが、ソ連のアフガニスタン侵攻です。所要防衛力構想ということはいいませんが、この大綱に定める防衛力では不足だということで、大綱を変えるべきだという議論が展開されたわけです。

このときには、大綱を策定した西広さんも防衛局から離れたところにいました。中曽根長官の秘書官をやった池田さんとか、そういう人たちが防衛局にいた。岡崎さんも国際参事官でいらっしゃる。佐々さんも防衛庁におられた。

それで大綱を変えるべきという議論がなされますが、正面切ってではありませんが、それに私どもが答えた。久保さんもそうだったと思いますが、大綱に定める平時においても備えるべき最小限の防衛力の水準にもまだ達していないのに、次の目標ばかり高めることにどんな意味があるのか、まず必要最小限といっているものを達成するのが先決だということで、先延ばし作戦で、恐らく１年ぐらい議論を闘わせたのじゃないでしょうか。
五百旗頭　ガイドラインは、限られた国内資源とかサポート、ソ連の脅威という状況、それに対する答えとして出てきたという面はあるのですか。

宝珠山　ガイドラインはニクソン・ドクトリンと非常に密接にかかわるものと理解しております。もちろん経済部分は別にして、第３番目ぐらいに、平たくいえば、自助努力のないところに助けには行かないという部分がありますが、それにかかわる部分です。

ニクソン・ドクトリンの背景をなすものは、これは私の解釈でもあるし、恐らく皆さん異存ないと思うのですが、米国の力が相対的にかなり落ちてきたことを自覚して、外国において力を使うことについてかなり慎重になった。あの部分は現地でできるだけ調達しようというポリシーの転換点でもあり、今も続いております。これを米国は、みずからの軍事力の合理化、効率化ということで説明しますけれども、他国に戦闘力はつけさせないけれども、支援力をつけさせることによって、相当の影響力を持ち続けていこうというポリシーでもあると思っています。

その中で、日本について、基地にしても、整備補給、衛生支援にしても、あらゆる面で自前で持ち得たのが、海兵隊はそのままだけれども、この部分はどこそこに依存しようという形で合理化していく。今までは、行動しようとしたら、米国ひとりで全部計画をつくっていけたのが、各国の協力を得なければならなくなる。そこで、日米防衛協力がステージに上ってきたと解しています。

五百旗頭　もっぱらアメリカの必要から出てきた話ですね。

宝珠山　米国の力の低下を補うものということです。

五百旗頭　ペンタゴンの方がそれを必要として、向こうのイニシアチブで始まったものですか。

宝珠山　そうご理解していただいていいでしょう。坂田さんがそれをきれいな形で説明し変える時期はございますけれども、それはその後だと思います。

村田　通常よくいわれていますのは、国会で社会党の上田哲さんが、日米政府間で秘密の話し合いがあるということをいわれて、坂田長官がそれを受けて、それはシビリアンコントロール上よろしくない、しかし、大事なことだからやろうというので、シュレジンジャーが韓国経由でやってきた75年に、坂田・シュレジンジャー会談で合意項目として出てくるという話になっていますけれども、先生のお話だと、そうではなくて、最初にアメリカ側からアドバルーンが上がったということですね。

宝珠山　防衛局長クラスの行き来の中で何度か対話がなされる過程で、相互にその雰囲気がつくられていったといえると思います。どちらの方が先にいい出したかというなら、私は先ほどのような認識ですから、何らかの形で米側が持ちかけてきたということはいえま

す。

日米安保条約に基づいて、相互に協力して日本も応援するという条約上の建前にはなっているけれども、実体はそうではない、これからはその部分を整備していかなければならない時代だという話を防衛研究所の講義で私がしたか、私の上司にしてもらう原稿を書いたのを覚えています。私どもはきれいに説明するために、みずからの発想のごとく説明していることは確かですが、日本から出たのかというと、すべてをそうとはいえないのじゃないか。そういう意味で、ニクソン・ドクトリンの根底をなす考え方がにじみ出てくる過程だと思います。

田中　統合年次防衛計画を毎年おつくりになって、日本側はこうだから、アメリカ側に「よろしく頼む」といいに行くのがそれまでの姿だと聞いていますが、そういうところで、これじゃうまくいかないのじゃないかという話になるということはあったんですか。

宝珠山　いつごろか覚えていませんけれども、大綱をつくる過程で、結果的に防衛力の整備が頭打ちになるのを頭に描いたわけですが、ちょうどデタントといわれた時期で、米国の力も緩められ、我が方の防衛力も一通り整って、トータルの運用、すなわちソフトの方に力を注がなければいけない、それを計画システムとして完成しようというのが防衛諸計画のシステム化、体系化です。これは若干おくれて出ますけれども、大綱の作成過程と並行して動きます。

運用計画が年度防衛計画（年度の防衛、整備等に関する計画）であり、この下には陸海空の各運用計画がありますので、トータルと考えていただいてよろしいと思いますが、これを米国とのすり合わせなしにつくる。こうなったら来てくれるであろうということで、そこで打ち切る。そういうと怒られるかもしれませんが、その程度にふまじめで済んでいた時期（能力が小さい時期）があったと思います。

それを、米国とも打ち合わせをして、こういう事態のときには、どの時点で米国のこれこれの規模のものが投入される、もう少しおくれてＢが来るという形にまで押し上げていこう、それで初めて抑止力として機能する、その研究をやろうじゃないかというのがガイドラインで、ガイドラインと諸計画の体系化とは並行しています。

村田　ガイドラインのもとでの日本有事の際の研究とか、その後極東有事の研究がございますね。あれは、かなり実質的な細かい研究がなされたと考えてよろしいのですか。

宝珠山　ガイドラインの中は３項目に分かれていますね。

１項目は未然防止の体制ということで、これは飾りだと思います。お互いに防衛力を整

備しましょうという、安保条約に書いてあることそのままの部分で、こういう研究をするけれども、これは戦うためではない、未然防止することが第一義だということを示したものだと理解していただければよいと思います。

ねらいは2と3で、2が日本有事、3は、短くいうなら極東有事の条項です。2の日本有事の部分については随分やりました。繰り返しになりますが、時程表の中で、日本も立ち上げなければいけませんが、こういうときにこれだけのものが来るというのが幾つかの想定の中で描けるというところまでは考えました。

村田　アメリカ側の主たる関心、アメリカ側がジョイントで大いにやりたいというのは、日本有事というより極東有事にあるわけですね。そういう意味で日本側の意図とずれがある。日本側は日本有事の研究を中心にやりたい、アメリカ側は極東有事をやりたいというので、ギャップみたいなものはあったんでしょうか。

宝珠山　まず2項からやることについては、米側も異存はなかったと思いますが、3項に入ってくると、防衛庁の手に負えない事態になるわけです。ここでは防衛庁は研究協力者の世界に入る。日本側は外務省がメインになるわけですが、外務省になると、防衛庁は1つの協力省庁であり、他の省庁の協力が必要ですが、この調整が十分にできず、米側がいらだったという意味ではそのとおりですね。

しかし、幾らいらだっても動かないものは動かない。その後さらに米国の力の相対的低下は進み、特にソ連崩壊後、財政事情もあると思いますが、現地依存がますます進んできている。これが、今回の首脳会談の中の日本に対する期待、課題です。

村田　日本有事にしても、極東有事にしても、具体的なシナリオになると、中心的な話し合いは制服レベルでなされたと考えてよろしいですか。日米の制服レベルで細部を詰める。

宝珠山　制服レベルというよりも、中佐クラス以下、部員以下ということになります。

村田　これは単なるエピソードですけれども、この間ジム・アワーさんが広島にいらっしゃってちょっと話をしたときに、お名前の出た池田元長官がそのころ、「日米の制服でそういう研究をやるのは、制服のモラール、士気を高めるには役に立つけれども、本当にサブスタンスのあることをやろうと思ったら、あなた方アメリカが話し相手にしなければいけないのは、制服ではなくて我々内局だよ」といった。それからしばらくして、多分丹波さんかだれかですが、外務省の安保課長に会ったら、「ああいうことをやるのもいいけれども、本当に日米の安全保障問題について真剣に考えようと思ったら、あなた方アメリカが話し合わないといけないのは外務省だ」といわれたというんです。それほど真剣に取り

組んでいないといいますか、訓練として日米が一緒にやることには意味がある、それぐらいの認識を内局の一部はお持ちだったのかなと思ったんです。

宝珠山　ワシントンとどこが結ぶかというのが長いこと課題で、ツー・プラス・ツーも、昔は大使と在日米軍司令官を外務大臣と防衛庁長官が相手にするような時代が続いた。そういう影響もあると思います。

ある防衛課長と私が話したときは、戦争の技術面になったら私どもは話ができない、普通科と飛行機乗りが話すこともできない、枠組みをつくるまでが防衛局の仕事だ、話しの細かな内容には入っていけない。施設の問題になって、ここに何万平米の施設が必要だというときに、今の能力では防衛課が一々できる話ではない、結局は枠組みの部分までが我々の仕事だというのは一致したと思います。

これは公になったかどうか知りませんけれども、戦争になったらユニフォームにやってもらうよりしようがないじゃないかとある高官がいったことがあります。それは計画段階でも同じことですね。ジム・アワーさんはその方の経験が深いですし、交際の範囲も海に非常に近い方です。ワシントンの政策レベルももちろんありますし、外務省の担当の方は、防衛庁と直にやられたんじゃ浮き上がっちゃうから、警戒するという面はあるだろうと思いますけれども、現実にアメリカがどう理解しているかといったら、もちろん枠組みをつくるときには外務省も入りますけれども、制服と防衛庁と組んで話をしたものについては分厚い成果が出ている。（極東有事等の）外務省との部分は、私も会議に出ましたが、会議はやるけれども成果が出てこないということで、正確に評価されているはずです。

外務省の会議には、当然のことながら大使館も入ります。すなわち、ワシントンの出先が来ている。在日米軍からも入ります。むしろそういう実態があればあるほど疎外感を持つのじゃないでしょうか。

田中　昭和54年11月に調査第二課長になられた直後にアフガニスタン侵攻がある。このときはどんなお感じをお持ちになりましたか。

宝珠山　私が行って間がないときに起こりまして、自由陣営結束しろというレポートを書いて、岡崎さんに上げて、それを基調にして大臣のところまでずっと行きました。もちろん、調査二課ですから、周辺の軍事情勢の分析、データは出しますけれども、これは判断の材料にしかすぎないということで出しました。

当時、池田さんが防衛課長でおられまして、どうなるかというようなことを聞かれまして、自由陣営が結束していけば、ソ連は後退せざるを得ない、もし軟弱な対応をすれば、これをよしとして既成事実を積み重ねていくのではないかということを書きましたが、（侵攻は）意外ではありました。

田中　当時、大平総理は、ソ連は本来防衛的な国家のはずだということをおっしゃっていますね。

宝珠山　Ｕ．Ｓ．Ａの大統領もそうでしたね。

田中　カーターは、本当にびっくりしたといったわけですね。

宝珠山　私どももそうでした。

田中　ただ、ソ連の軍事力について根本的な見方を変えなければいけないというところまではいかなかったんでしょうか。結束すれば大丈夫だということでしょうか。

宝珠山　ソ連の行動パターンはブレジネフ・ドクトリン以来ずっとあるわけですから、あの時期にあそこに出るということについての意外感で、これをさらに他に及ぼすことは防止しなければならない、そのためには自由陣営結束して当たるべしという論法です。

そのときに、苦労のあげくに「同盟」という言葉をレポートに入れたんです。当時はワープロはございませんで、手書きで出しましたけれども、削ったところに入れたように記憶しています。

田中　大平さんが「同盟」という言葉を最初に使ったわけですが、オリジナルアイデアは宝珠山さんだと思ってよろしいですか。

宝珠山　それはわかりません。調査二課長になって、軍事情勢がいろいろある中で、官邸に軍事情報をきちっと入れてほしいというのがどこかから入りました。それで、「おまえが窓口になれ」ということで、汚くてもいいということが請負の条件でしたけれども、どうしても図表が必要な場合は別にして、このくらいのペーパー２枚ぐらいを限度にして、１週間に１回レポートを出し始めた。その何号目かです。私は11月に行きましたが、（アフガニスタンのときは）正月もみんな出てきたと思います。そういうときは「号外」を出した。

田中　ここで「同盟」という言葉を何とかして使いたいというのは、先ほどおっしゃたように、自由陣営が結束しなければいけないということですね。

宝珠山　はい。そういう趣旨で使ったんです。

田中　岡崎さんが防衛庁参事官で来られたときに、調査関係はみんな面倒を見ていいとい

われて、彼はかなりびっくりしたとおっしゃっていましたが、これはかなり特別なアレンジメントだったのですか。

宝珠山　調査一、二課は岡崎参事官の管轄ということで、分析の方が中心に広く担当されていました。

田中　「同盟」の部分は、問題になった鈴木さんの方の経緯は……。

宝珠山　大平さんが使った実績がありますので、鈴木さんに随行される方も気楽に使われたんじゃないかと思います。「國防」に、「同盟」という言葉を既に大平さんのときに使われていたという趣旨で書いてあります。

村田　読売にインタビュー記事が載っていませんでしたか。鈴木のころに、一緒に通産かどこかに……。

田中　畠山さん。

宝珠山　興味深く読みました。ちょっと感情的な感じを受けました。これ（「國防」）を読んでいただくと、経過から見て、あれはやっぱり鈴木さんの方が負けちゃうんですね。伊東さんも外務大臣でケツまくるし。

田中　畠山さんは鈴木総理を何とか弁護しなければいけないとお思いになったんですかね。

宝珠山　でしょうね。あのとおりいったかどうかさえわかりませんけれども、あの表現はちょっときついなと思って私は読みました。

村田　ちょっと以前に戻らせていただきたいのですが、日本は80年にリムパックに最初に参加していると思うのです。丸山昂先生のお話では、リムパックは本来78年に参加するように丸山次官のとき準備をしていたけれども、海幕の根回しが足りなくて時間が足りなかったので、78年が間に合わなくて、１回おくらせて80年参加ということになったというお話だったのですが、そういうご記憶でございますか。

宝珠山　それは私は知りません。基本的な流れとしては、防衛協力指針などに出てくるように、ホスト国になるべくサポートさせる形で、みずからの力を最大限に効率的に発揮する。日本に空母を持たせることはだめだけれども、空母を護衛させることができれば一番いいわけです。戦闘力にはならないけれども、いうことは聞く。いうことを聞かないときには困りますけれども、米国としてはそれが一番いい姿です。

リムパックというのは、いろいろいわれるかもしれませんが、防衛練習ですね。78年と

いうとまだガイドラインもできていない。ルーティン化してくれば別ですけれども、あの種のものは2年ぐらいの研究期間、調整期間が要る。そういう流れの中で、準備不足というのはあり得るかもしれませんが、私はそのこと自体は承知しておりません。

田中　一番古い話で、60年代の脅威感はどんなふうに考えたらいいか、よくわからないんです。中国が核実験をやって、文化大革命があって、一番最初にお話があった自主防衛とか中曽根構想が出てくるときの脅威認識ですね。先ほどのお話も、脅威の算定もほとんどソ連についてお話しになっていましたけれども、基本的にはソ連だということですか。

宝珠山　ソ連の能力が一番高い。中国は、外征能力について、我が国まで及ぶ可能性は非常に小さいものだった。仮に尖閣に及んできたとしても、沖縄、九州まで来ることは難しい。もしそこまで来れば、こちらの方は非常に戦いやすいというくらいの感じですね。したがって、沖縄に入ってくるにしろこないにしろ、どの程度の規模のものを置かなければならないかというと、小さいゲリラ的なものが来たときにどう対応するのかということの方に重点が置かれる。沖縄返還のときに配備されたものがまさにそうであるように、あの程度の認識がずっと続いていたといえます。

田中　三矢研究も朝鮮半島有事ですね。ソ連からの脅威ということで考える場合は、冷戦の終わりのころのように、オホーツク海方面の想定と朝鮮半島と両方あると考えたのですか。

宝珠山　朝鮮半島のことは、朝鮮戦争のことなどがありますので、ケーススタディーの中から抜けたことはありません。中国であれ、ソ連であれ、朝鮮半島を経由して来ることが考えらやすい。何らかのサポートがあって来るという考え方があります。北部日本もある。我が方は2正面に分断されるわけです。北を重視して来る場合と、朝鮮半島経由を重視して来る場合によって、我が方の作戦計画は異なるわけですから、それをどう判断するかは、そのときにおける1つの大きな分かれ目になるという認識はございます。

田中　私、この間のペーパーにも書いたのですが、当時の政治家とか外交官の方は、ほとんど脅威なんかないみたいな感じですね。

宝珠山　まさにそうであったがゆえに、防衛庁の中では、所要防衛力構想などといいましても、なかなか受け入れないで来たのが実態です。防衛庁でまとめていくことさえできないわけですが、当時は国防会議ですが、国防会議で審議しようとすると、そこで叩かれてぽしゃるということが背景にあったろうと思います。私は現場にいませんでしたので、わかりませんが、それを1次防、2次防、3次防と続けていく中で大変苦労されたと思うん

です。

そのころ出てくるのが、意図と能力とどちらに視点を置いて考えるかということで、防衛庁は能力をとる。能力は現存するものですし、米国との情報交換の中で一番豊富に持っていたわけです。この豊富な軍事力の配置は、最近こそかなり出るようになりましたけれども、当時は防衛課にいてもなかなか見れなかった。もう少しディスクローズしないと論議できないじゃないかというのが、大綱策定過程で坂田さんなどと一致して、第２回目の防衛白書が出る。防衛を考える会の中で、我が国周辺の軍事のあるがままの姿を示そうじゃないかということでやったのもございます。

田中　そうすると、60年代は、防衛庁の中の専門家の見方と社会の認識とのギャップは非常に大きかったということじゃないかと思うんです。

宝珠山　大きかったといえると思います。情報も出していなかったせいもあるでしょう。

田中　これが一番縮まったのは1980年代の前半ぐらいといっていいんでしょうか。

宝珠山　それを縮めることに非常に大きく貢献したのは岡崎さんでしょうね。幸か不幸かアフガニスタン侵攻が起こって、このとおりじゃないかという形で出てくる。米国の方も、いろいろなデータでソ連の脅威を喧伝する。ソ連の脅威を書いた本が書店にあふれた時期ですね。

村田　ご丁寧にミンスクが来ましたね。

村田　最後に確認をさせていただきたいのですが、西広さんのインタビューの中で、沖縄返還の前に、それとの関連で、西広さんを含めて内局から数人、あとは制服の方で朝鮮有事のコンティンジェンシープランをつくって、それを防衛庁のトップの話し合いまで持っていったけれども、長官や次官はそれを防衛庁の意見としては取り扱えないというので、彼はそれを国際担当の参事官に渡して、それが外務省経由かどこかで総理の目にとまったかどうかわからないけれども、ともかくそういうものをつくっていた、随分いろんなことを検討して、今でも十分対応できるというようなことをいっておられるのですが、宝珠山さんは、そういうことがあったことはご存じない、あるいはかかわっていらっしゃいませんでしたか。

宝珠山　「コンティンジェンシープラン」という言葉は承知しておりますが、それがあったかどうかについては、当時、防衛課を離れたところにおりまして、わかりません。オペ

レーションズリサーチを通じて出されるものの中には、その種のものがケースとしてあります。しかし、これはあくまでペーパープランですね。コンティンジェンシープランというものがあったとしましても、即使えるという意味でのコンティンジェンシープランではなく、机上のもので、ワーカブルなものではないのではないか。

どこでもいいですけれども、自衛隊が動こうとしたときには、航空基地であれば管制をどうするかということから、具体的にどこにミサイルを配備するか、どういう手続を通じてその用地を合法に取得するかということまで計画されないと動かないのですが、それをやったということは承知していません。オペレーションズリサーチの世界では、これは別途やられたものとして、こういう配置でいけば、ここから見えるはずだから、ある確率で落とせる、被害はここにとどまるということがコンピュータで出される。

田中　今の状態とも関係するのですが、ワーカブルな案をつくるのは数人でできることじゃないですね。

宝珠山　できません。数人でできるのは枠組みの世界です。施設系統はだれを中心にしてどうしようとか、施設の中でも、海が必要とする施設と、陸、航空が必要とする施設と、同じ人ではどうにもなりませんし、階級が高ければいいというものでもありません。かなり広がりますので、それがやられたということはないと思います。それがやられていないから、いまだに米軍の方はいざというときについては不満がある。一昨年の北朝鮮のことでも不満が出てきたということではないかと私は理解しております。

田中　最近の話ですが、今度の日米共同宣言で近隣の有事についてもこれから検討するといっていますけれども、相当かかりますね。

宝珠山　「研究」といっておりますが、研究をして、法制化をして、ワーカブルなプログラムまで落としていくということになると、大変なことです。

ついでに申し上げますと、２年前に北朝鮮がどうこうなったときに、その種の作業ができているということを高官がおっしゃったといっておりますけれども、「研究してみたことがある」ということで、現場の話ではありません。本当にこれを現場に落とすとしたら、今の体制ではできない。

土木屋さん、建築屋さんでもいいんですけれども、少なくともその地方公共団体の土地に詳しい人たちの協力を得て、所有関係まで洗わなければいけない。これは強行的にやったら怒られる話ですからね。いざとなったときはわかりませんけれども、これはどなたが所有しているという書類までつくらなきゃだめですよ。

どうであれ、これは使わせていただきます、補償はこうします、いつの時点でどうしますというところまでいかなきゃいけないし、その予算科目は何か、予備費はどうか、予備費が組めるか組めないかという議論をやっていますと日が暮れてしまうから、そこまでいったら予備費は組んだことにしようといって私どもの作業をスタートさせるとか、予備費が幾ら要るかを合理的に説明できる資料をつくろうというところまではいく。ところが、日本は戦後そういうことはやっていない。それが体制のおくれだと思いますが、その前にまず研究をして法制を整備する。法制に基づいて訓練をしなければ、いざというときに動かない。訓練をするために、しかるべきところに任務を割り当てていく。これは大変なことです。

田中　どうもありがとうございました。

村田　どうもありがとうございました。